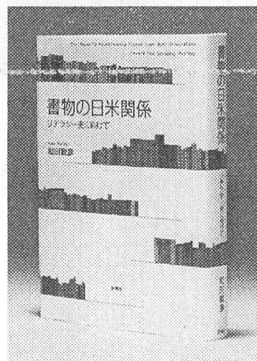


書物の日米関係



図書館の本がどのような形で收藏されているのか、普段あまり意識することはない。だが、図書館の蔵書にも歴史がある。それは国の近代史を色濃く反映しているし、旧植民地や中国大陸などに残る日本語図書にしても同様である。蔵書をめぐる政治学がここにあり。

本書は、戦前から戦後にかけて、米国の主として大学図書館における日本語図書蔵書の歴史を多角的に論じている。図書が購入された経緯だけを見て、資金の出所や資料の選択など、そのときの日米関係が影響を与えている。

日米開戦によって、日本語能力のある人材の育成が急がれ、その後の日本研究の基礎をつくったことは比較的知られた事実であるが、これを蔵書の歴史から見直すと、また興味深い。

敗戦後、カリフォルニア大による三井コレクシヨンの購入で、GHQの印象を良くするために破格の提示をした三井

和田 敦彦著

(新人社・40635円)

蔵書をめぐる政治学

が、その後の財閥解体の方針を見て価格をつり上げた駆け引き。統一基準のないまま図書館になされていく分類作業の在り方をめぐる真剣な議論。また、作業に当たった日本人、日系人たちのライフヒストリーなども描かれ、一ページごとに引き付けられる。

著者が蔵書の歴史をひもとくのは、わたしたちが自由に書物を選んで読んでいるように思えても、実は書物環境に規定されていると考えるからだ。読む行為はいかに形成されていくのか。「知のインフラ」をとらえる

の根本を問おうとする。そのために「リテラシー」という言葉も提唱しているが、「読書環境史」などの方が分かりやすいかもしれない。

最近の学生を見ていると、図書館にも書店にも行かず、インターネット検索のみで論文を書く学生がいくら現れるのではないかと思えるほどだ。著者は、ネットの利点を最大限に生かしつつ、そこから見えてこない

「蔵書」も、足で稼いで調べあげた。これからの時代の研究者の在り方を示すものとしても一読に値する。

ことで、人の思考や感情 (安田敏朗・一橋大教員)